

防災— 亡き妻が遺したもの

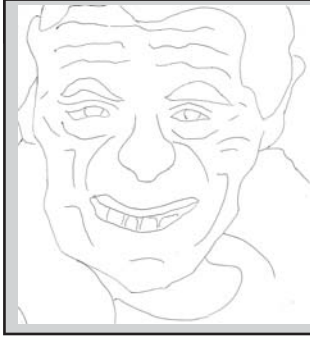
8th chapter 東海大震災理論編

第五回

心身ともに立ち直った時三は、名古屋に来た本来の目的をようやく思い出す。震災ボランティアとして、講演をするためにわざわざ亡き妻が眠るこの地を訪れたのであった。原点に立ち返った時三は、後ろ髪引かれる思いを断ち切り、せっかく再建された養護施設を後にする。新妻になりえたかもしれない女性を置いての旅立ちは時三の心に痛恨の一撃を与えたものの、二度と震災の悲劇をくりかえすまいという亡き妻との誓約を果たすため、時三は名古屋へ、そして孫娘の紗耶香の家へ一ヶ月ぶりに戻った。

帰った自分を待ち受けているのは怒り心頭に発した紗耶香だと時三は予想していたが、そこにいたのは祖父の帰りを本気で心配していた心優しい孫娘だった。紗耶香の意外な一面を知った時三は、彼女のためにもやはり講演を完全なものにしなければならないと一念発起。誰にでも分かりやすい講義にしようと、試しにあの悲惨な惨禍を知らない紗耶香で模擬講義をしてみた。

時三(65)



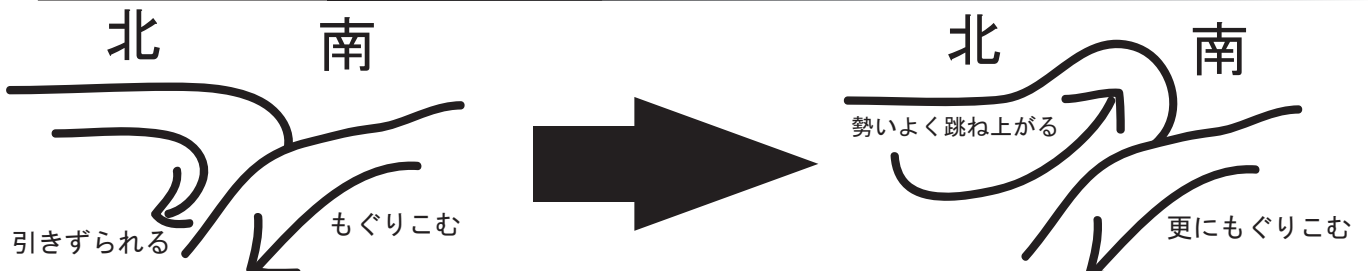
災害にあったことのない人に、いかに災害の恐ろしさを伝えるか。これが最大の難関であり、永遠の課題である。彼は自己の体験と客観的科学的双方からアプローチを試みているが、まだ開発途上らしい。

紗耶香(19)



大学生は災害弱者にも強者(?)にもなりうる。特に一人暮らしの大学生は、一般に地域に馴染みがないので孤立無援になりやすい。が、大学生には知識と体力の両方があるので、被災後は大活躍する可能性がある。行政やNPOが大学生の防災教育に熱心なのはこのためである。

東海大震災の起こる仕組み



静岡、愛知の南の海には駿河トラフという海溝がある。ここで南(海側)のプレートが北(陸側)のプレートの下にもぐりこんでいるのじゃ。このとき南のプレートは北のプレートを道連れにしながら地下に沈み込んでいくゆえ、北のプレートの先端の一部が溝に引っ張られることになる。じゃが、北のプレートの根本の方の大部分は沈み込まぬゆえ、沈み込んだ一部のプレートを地上に引きずり戻そうとする。沈み込みは徐々に起こるのじゃが、戻るのは一瞬で起こる。つまり今まで溜められたエネルギーが一瞬で放出されるのじゃ。これが東海地震の原理じゃ。
※下敷きの片方を持って(陸側)、もう片方を下に曲げる。手を離すと勢いよく跳ね上がる。振動が手に伝わって震える。簡単に言うとそんな感じじゃ。

東海大震災の特徴

1. 周期的に起こる

東海地震はその被害のすさまじさから、かなり古い時代から被災記録が残っている。過去の文献を紐解くと、東海地方の大地震は 100・150・200 年を 1 周期として繰り返していることがわかる。今年で前回の大地震から既に 153 年経過しているゆえ、そろそろ来るのではないかと言われている次第じゃ。

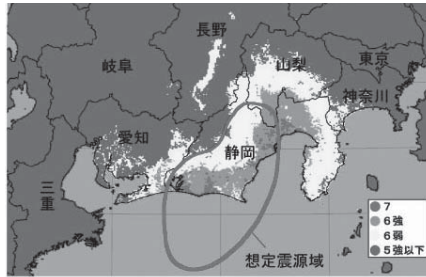
684 年 白鳳地震	約 200 年
887 年 仁和地震	約 200 年
1096 年 永長地震	約 100 年
1200 年 ぐらい？	約 150 年
1360 年 紀伊・摂津地震	約 150 年
1498 年 明応地震	約 100 年
1605 年 慶長地震	約 100 年
1707 年 宝永地震	約 100 年
1854 年 安政地震	約 150 年

2. 規模が大きい

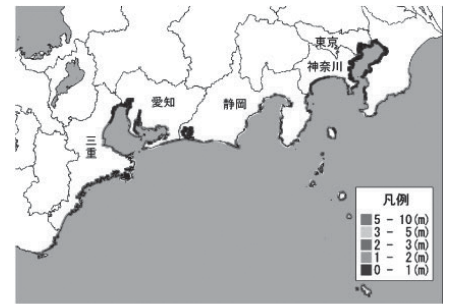
東海地震ではおよそ水素爆弾一個分（広島型原子爆弾 1000 個分！）のエネルギーが放出される。阪神大震災の 100 倍以上のエネルギーじゃ。地震の発生する場所（震源）は海ゆえ、そのエネルギーがそのまま陸に直撃するわけではない。じゃがいかにせん元々のエネルギーが大きなものじゃから、地上にもかなりの影響が出るのではないかと考えられているのじゃ。

3. 津波が起こる

震源は海じゃ。よって、津波が起こるぞ。特に危険なのは震源に近い静岡県沿岸や渥美半島の沿岸と予測されておるぞ。



「東海地震の想定震源域」と「想定される震度分布」



想定される海岸における津波高さの分布

東海大震災の被害総論

震災は様々な領域に被害を及ぼすため、それを全て網羅して被害予測をするのは難しい。また、被害の中には客観的に計れないものや、数値に表すことができないことも多いため、このデータはその意味では正確ではない。

具体的にどの状況でどのような被害が起こりうるかは前号・前々号で紹介したので、今回は敢えて全体的な被害を数字を用いて表してみることにしよう。

区分		東南海+南海 (想定されている地震)	(参考) 震源が少ない場合 東海	(参考) 震源が多い場合 東海+東南海+南海
死者数 (人)	建物倒壊	6,600	6,700	12,200
	津波	8,600	1,400	9,100
	斜面災害	2,100	700	2,600
	火災	500	600	900
	合計	17,800	9,200	24,700
全壊建物数 (棟)	揺れ	170,200	170,000	308,500
	液化	83,100	26,000	89,700
	津波	40,400	6,800	42,300
	斜面災害	21,700	7,700	27,200
	火災	313,200	250,000	472,500
合計	628,700	460,000	940,200	
経済的被害	直接被害	43兆	26兆	60兆
	間接被害	14兆	11兆	21兆
	合計	57兆	37兆	81兆

(注) 1 数字は概数。内訳と合計は必ずしも一致しない。
死者数は午前5時発生、全壊棟数は午後6時発生を想定。
2 東海；中央防災会議「東海地震対策専門調査会」平成15年3月18日公表
東南海+南海；中央防災会議「東南海、南海地震等に関する専門調査会」9月17日公表
東海+東南海+南海；同上

一被害の予想の難しさ

地震の被害は「いつ、どんな環境で起こったか」によって大きく左右される。冬は被害が大きくなるとされるが、これは暖房器具の影響で火災が発生するからじゃ。夜は被害が大きくなるが、これは明るければ助けられた人が、暗さのため助けられなくなるからじゃ。雨が降ると火災は起こりにくくなるが、避難がしづらくなる。天候だけでもこのように大きく被害が変わるのじゃ。まして、すべての条件を勘案して予想するのは不可能。ゆえに左の数字はあくまで目安と考えるように。

D 核の恐怖

一息付けるところまで逃げ出せたようだった。

周囲の人々も必死になって避難してきたようである。ある者は疲労を顔に強くにじませながら、ある者はしたたる汗を懸命にぬぐいながら、より安全な場所をなお求めて逃げ出していた。

そんな我々にヨウ素が配られた。

専攻が物理学だった私にはピンと来た。地震の被害が一番大きいであろう静岡にある原子力発電所がメルトダウンを起こしたのだろう。メルトダウンとは、発電所の不具合により核分裂が暴走し、放射線物質がまき散らされることである。この放射線物質が体内に取り込まれると、命に関わるのだ。

原子炉が崩壊するとまずヨウ素が風に乗って飛散する。だが一定量ヨウ素をあらかじめ摂取しておけば、あとから摂取した危険なヨウ素は吸収されにくい。

自治体のすばやい対応に驚きつつ薬を飲み込んだ私は、一息ついたあとまた歩き出した。→Eへ

E 悲劇の誕生

妻の身を案じた私は、一路我が家を目指していた。

妻は腰を痛めている。日常生活には支障はないとはいえ、この震災時には無事がどうか案じられたからだ。だが私の勤務地から自宅まで帰るためには名古屋の市街地を横断しなければならない。焦っていた私は、密集地帯を横切る危険性に気がつかなかった。そして気がついたときには、パニックに陥った人の群れに囲まれて、どうしようもなくなっていた。飛び交う怒号、右往左往する人々。あてもなく動く人々の流れの中で自分を保つことに精一杯だった私には、とてもこの先に進む余裕などなくなっていた。

進むか、それとも退くか。脳裏には、朝笑って私を送り出してくれた妻の笑顔が刻み込まれている。究極の決断を迫られた私は—

1. それでも妻を助けに行く→2ページ後のOへ
2. 妻が独力で逃げ出していることを祈り…きびすを返した→Fへ

F 大火災

津波の心配もなく、パニックに見舞われるおそれもない場所。そんな避難所を探し出すのにおよそ30分もかかった。たまたま避難所への誘導の列に引っ掛かっていなければ、もっと長い時間さすらうことになっていただろう。土地勘もなく、体力もない私は限界ぎりぎりだったから本当に助かった。

だが、ここで予想もしなかったアクシデントが勃発する。避難民の誘導に当たっていたガソリンスタンドから、まさかの出火があったのだ。

動揺は群衆だけでなく、警官にも伝わった。そしてその一瞬の指揮系統の乱れが、群衆の乱れも生んだ。危険を見越して逃げ出そうとする者、率先して消火活動に当たろうとする者。思惑は様々だったが、現場は混乱の一語に尽きた。私の取るべき行動は—

1. 逃げまどう民衆を大喝→Gへ
2. 率先して消火活動→2ページ後のPへ

G 眠れぬ夜

各人には各人のなすべきことがある。現役中社内の危機管理体制の構築を担っていた私は、緊急時に個々人が勝手に判断して動くと、余計に事態は混乱することを知っていた。

朝礼で鍛えていたから声量には自信があった。だから市民を一喝してその場を鎮めることにためらいはなかった。そうして私が周辺事情を処理している間に、消防隊が到着して火を消してくれた。助かった。

避難所に無事到着した私は、まず愛しき妻の姿を探した。自宅からは比較的近い避難所だったので、もしかしたらここにいるかもしれないと思ったのだが、日が暮れても妻が現れることはついになかった。彼女は無事なのか、明日からの生活はどうなるのだろうか。不安を抱えながら眠りについた。→Hへ

H 流言？

不安な夜を明かした私は、翌日妙な噂を耳にした。北朝鮮の工作員がこの混乱に乗じて、若く美しい娘を拉致しているらしい。また別の人からは、アラブ人が自衛隊への報復として爆弾テロを企てているということも聞いた。さらには不法滞在中のブラジル人達が日頃の鬱憤を晴らすため、次々と店を打ち壊しているというのだ。一聞した限りでは、非常に信憑性の高そうで説得力もある話だった。

既に自警団が組織され、そういう危険に関して注意を呼びかけているらしいが、実は彼らはどうやらより直接的な対策を講じていた。日本人の人種意識は震災時にも健在であるらしく、外国人は他の避難所へ収容されている。そこに、襲撃をかけようというのだ。

加勢を促された私は—

1. 自分たちで身を守るしかない→Jへ
2. 政府がなんとかしてくれるはずだ→Iへ

I 迷走する政府

中央政府の動向が知りたかった私は、ラジオの電源を入れた。市や県が動員できる人員や物資には限りがあり、それゆえこのような広域災害には政府が対策を講じてくれるはずだった。

だがその期待は幻想であったことを知ることになった。その頃東京では被災者の苦労をよそに、政争劇が繰り広げられていた。与野党が拮抗する議会では、互いに失策をすることを恐れて具体的な対策を立てることができなかったのだ。国会や国民の怒りの矛先はやがて内閣へと向かった。東海地震で内閣が想定していたのは、地震がきちんと予知され、その正確な情報が避難民にも東京にも正しく伝わっている状況だった。だが情報網が寸断されるという想定外の事態の中、内閣は無為無策だった。そんな内閣にしびれを切らした議会は、突如として内閣不信任案を可決。自暴自棄になった内閣は対抗して議会を解散。

国を挙げての政策を検討・実行する人間が誰もいなくなってしまったため、結局被災地は独力で対応することを余儀なくされた。だがそれにも限度があり、治安を維持する力も、暴徒を押し留める力ももはや尽きかけていたのである。→Jへ

J 虐殺の日

奇襲は「成功」した。夕方のラジオニュースで、避難所でコロニーを作っていた移民たちが覆面をした謎の集団に襲われ、1000名を超える死者が出たことを知った。この「事件」は、複数の場所で次々と起こっており、襲われる人種も様々だった。県は「移民同士の内紛」と断言し、事態の收拾を図ろうとした。だが夜になり、真相が被害者側の生き残りに伝わると彼らは報復を決意。明け方時三が目覚めたのは、曙光のためではなく騒音のためだった。瓦礫や廃材で武装した彼らに一般市民は到底太刀打ちできず、自警団が到着するまで暴行・殺戮の嵐が吹き荒れた。そして自警団が到着すると、ついに日本人と日本人以外が全面的に衝突することになった。この日の事件での死者は双方合わせて1万人余り。地震自体の被害より大きい被害が出たことは、後世から大いに非難が出るだろう。だが私が私をもっとも非難しなければならないのは、この一連の事件で何も出来なかったことだ。息子夫婦があの大虐殺で命を落としたことを知ったのは、ずっと後になってからだった。→Kへ

K 結末

一連の紛争での死者は五日経った現在で二万人余。報復が報復を生む悪循環の中では避難生活も配給もままならない。やがて水が不足するようになった。湿気が多い日本において水は衛生の生命線。飲み水さえあれば大丈夫と予想していたが、衛生の悪化による疫病の流行までは誰も考えていなかった。

病原菌を持ち込んだ外国人が悪いのか、それとも彼らの血を飛沫させた日本人が悪いのか。責任は善悪を問わず誰にも等しく降り注いだ。医療チームを派遣しようにも道路は地震と抗争で寸断されており、スタッフが現場に着くまでの三日間の間に一万人を越える病死者とそれに数倍する重病人が出た。

皮肉なことに、この疫病が秩序を取り戻した。なぜなら日本人もそれ以外も、武装市民も非武装市民も、もはや立ち上がるだけの気力は誰にも残されていなかったのである…。→Qへ

L
死

何がなんだかよく分からないが、一刻も早く逃げ出さなければ。あわててトイレを飛び出した私を迎えたのは、天井から高速で落下してきた蛍光灯だった。避ける間もなく、重い音を立てて脳天に直撃する。私は最後の刻を、今年施設改善のための予算を切りつめなければ良かったと後悔しながら迎えた。
—となることを予想してしまった私は急遽予定を変更し、個室に入って身を守ることにした。→Bへ

M
死

私の愛社精神は一介のパート労働者となった今でも衰えることはない。急いで階段を駆け上がったのは、同僚や手塩にかけた元部下の安否が気にかかったからだ。だがほどなくして余震が発生すると、私は自分の行為が無謀だったことを知る。激しい余震は私を転倒させたが、それ以上に建物自体に大きな被害を与えた。私は床にへばりついたまま、ただビルごと倒壊していくのに身を任せる他無かった。
—となることを予想してしまった私は急遽予定を変更し、自分だけでも脱出することにした。→Cへ

N
死

良く整備されて逃げやすそうな堤防治いの幹線道路をつたって逃げた。いつもうるさい波の音が聞こえないのが気になって海岸をふと振り返ると、いつもよりかなり海面が下がっていた。これは潮の満ち引きのせいではない、まずい…だが逃げるには遅すぎた。慌てて高いところへ逃げ出そうとした市民達を、ものすごい高さの津波がものすごい早さで飲み込んでいくのが見えた。三秒後は我が身だった。
—となることを予想してしまった私は急遽予定を変更し、始めから丘の方へ逃げることにした。→Dへ

O
死

必死の思いで人混みをかき分け、なんとか市街地を突破しようとしていた。とにかく前に進むことしか考えていなかったから、私には周囲を顧みる余裕など無かった。だから、迫り来る轟音にも悲鳴にも気付かなかった。突然、悲鳴をまとった大きな何かに突き飛ばされた。肋骨が折れる感触がしたが、たぶん致命傷だろう。なすすべもなく地面に接触した私は、自動車が人混みを猛スピードではねとばしながら進んでいくのが見えた。そして街灯にぶつかり、爆炎をあげたのを見届けて力尽きた。
—となることを予想してしまった私は急遽予定を変更し…妻を見捨てて一人で逃げ出した。→Fへ

P
死

公共心の高い私は、いてもたってもいられず飛び出した。火災は最大の敵であり、これを退治するためには総力戦をもってするしかないと思ったのだ。そんな私の行動が他の人には違うように思われるとは夢にも思わなかった。人々は私を「危険だから逃げ出した」と勘違いしたようで、それなら自分もと一斉に逃げ出し始めたのだ。この混乱の中で消火活動は無理だった。おりからの強風に吹かれその火災は成長し、人を、物を、何もかもを巻き込み愛知県を覆い尽くす大火災となってしまった。
—となることを予想してしまった私は急遽予定を変更し、市民の好き勝手な行動を大喝した。→Gへ

Q
目覚め

目が覚めた。悪夢を見た日は決まって寝覚めが悪いが、今夜のそれは格段だった。
だがそんなことは言っていられなかった。今日は講演の日。自分が今方見た地獄のような惨状を、災害で命を落とした人々の無念を、できるだけ多くの人に伝えなければならない。あの日以来、妻と息子夫婦を失って以来、自らに課した宿命だった。
それにしても、と思う。あのときの行動は後から見れば間違いも多かった。もしかしたらもっと多くの人命を救えたかもしれないし、もしくは全く逆で一見間違った行動を取ったから生き残れたのかもしれない。今となっては検証すべくもない。この罪悪感はおそらく生涯消えることはないだろう。心が完全に晴れることはないだろう。
紗耶香が起こしに来る。私は急遽暗沈んだ表情を変更し…ひょうきん者を装って今日も一日を送る。→END

次回、時三編今度こそ大感動のグランドフィナーレか！？

文責：ひでっちょ